

徳川政権と京都二條城警衛体制の確立

渡 邊 忠 司

〔抄 録〕

本稿は、徳川政権の畿内・西国支配体制の成立期に焦点をあてて、寛永元年（一六二四）の伏見城の廃城に伴う二條城の警衛態勢の整備過程について考察する。慶長五年（一六〇〇）からの徳川政権の畿内・西国支配体制の整備過程で、二条城守衛体制の確立は大きな転換点であった。この確立過程が元禄十二年（一六九九）

の二條城御門番組の再編成によって完結したとみて、これを検証する。

キーワード 伏見城番、二條城城代、御門番組、大番頭・大番衆

はじめに

本稿は、徳川政権の畿内・西国支配体制の成立期に焦点をあてて、伏見城の廃城に伴う警衛態勢の二條城への移管と二條城の警衛態勢の整備過程について考察する。ここでは徳川政権の畿内・西国支配体制を直接には取り上げないが、寛文八年（一六六八）の京都町奉行所設置に至る過程で、二條城の警衛態勢の整備が持つ意義を確認し、惹いては徳川政権の畿内・西国支配行政体制の実態解明の一助とすることを意図している^①。

寛永元年（一六二四）の伏見城の廃城と同二年以降の二條城警衛態勢の整備は、慶長五年（一六〇〇）から寛文八年に至る徳川政権の京都および畿内・西国支配体制の整備と変化の過程で、大きな転換点であった。元和元年（一六一五）の豊臣氏滅亡以後、伏見城代の廃止と大坂城代の設置という一連の伏見城の軍事的役割の減退が畿内地域の軍事的な情勢変化を象徴しており、それが元和以降の所司代職務の分轄・分担を可能にし、寛永十一年の五味豊直と小堀政一の畿内訴訟沙汰取り扱いという事態に至る^②。

二条城の守衛体制は寛永二年の二條城代設置と大番衆在番、伏見城

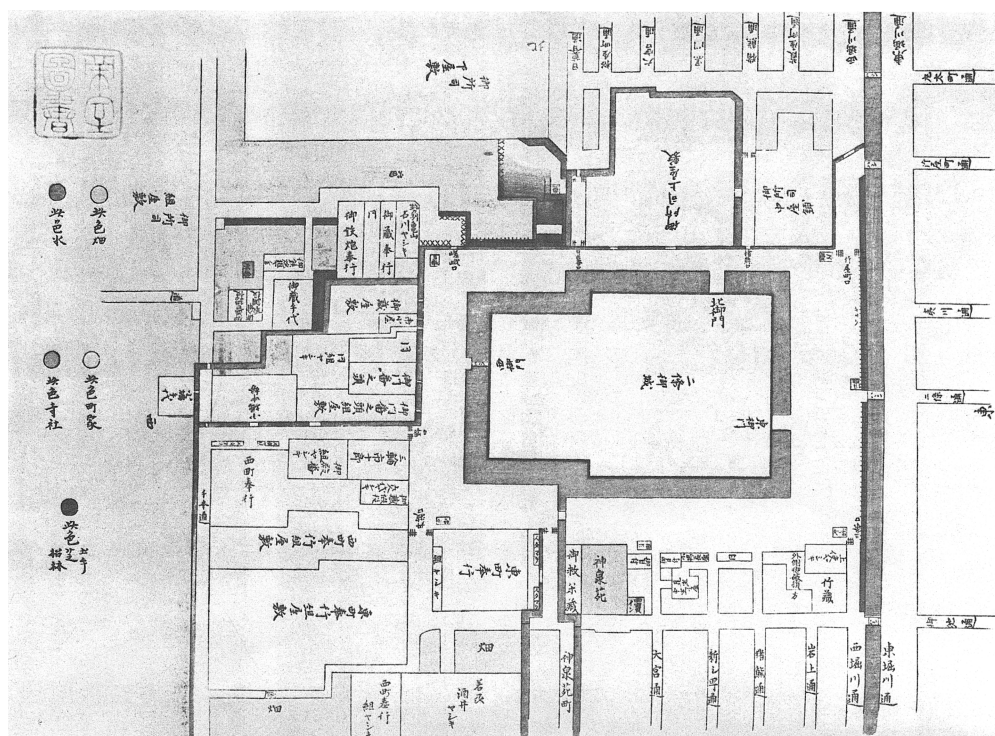


図1 「二条城」（備考：『江戸時代図誌』1「京都一」による。）

御門番組など警衛部隊の伏見城からの二條城移動によって始まったが、京都所司代・京都町奉行を基軸にした京都および畿内・西国支配行政体制の確立と対応させれば、その体制は元禄十二年（一六九九）の二條城御門番組の再編成によって確立したとみることができる。御門番組は、図1に見られる二條城の東御門（大手門）と西御門および北御門を守衛・管理する門番である。

御門番組は二組あり、一組が与力一〇騎・同心二〇人の編成であった。二組が交替しながら三つの門の守衛と管理を担当したが、二組均等の編成となったのが元禄十二年で、人員編成はこれ以後徳川政権の終焉まで変更がなかった。この御門番組の再編成に注目する理由は、元禄十二年が貞享年間から元禄期にかけて、京都町奉行・伏見奉行に限らず大坂町奉行・堺町奉行また畿内幕領諸代官の更迭や処分など、元禄期の畿内・西国支配機構の改変・再編という一連の行政機構の再編成の時期にあたり、それが二条城御門番組の再編、京都町奉行所与力・同心の再編成で決着しているとみられるからである。^③

ところで、最近の畿内・西国の支配体制に関する研究をみると、岩城卓二・小倉宗両氏の研究があるが、いずれも大坂城代や大坂町奉行に関連した支配構造の機構と機能および非常時への対応に研究の焦点がおかれ、全面的な畿内・西国の支配行政体制を対象としているとはいえない。岩城氏の研究では、大坂城代も軍事的側面だけではなく、大坂町奉行が登城して裁許を仰ぐ事例を挙げながら、民事行政にも権限を発揮していたこと、また譜代藩尼崎藩の役割が大坂城代の職能への補助・補完機能にあったことなどを指摘し、畿内・西国の支配行政

機構について綿密な分析を行っているが、それ以上ではない。

小倉氏の場合も、大坂町奉行の職能に関する徳川政権の処遇や指示の事例を検討し、畿内・西国支配行政体制の構造を考察している。しかし構造とはいいながら、これも役割や機能側面に焦点をあてた研究であって、体制そのものの構築や実務吏員の職務を対象としてはいない。両者の対象とした時期も必ずしも初期・前期ではなく、むしろ中後期を対象としており、畿内・西国の支配体制、八人衆体制や畿内の幕藩体制の成立過程を考究したものではない。寛文八年以降の京都所司代・京都町奉行、大坂城代・大坂町奉行を基軸にした「体制」の変容・変化や機能の実態を検証したものといえる。研究状況をふまえれば、近世前期の徳川政権の畿内・西国支配体制そのものの実態に関する研究は、必ずしも進捗しているとはいえないようである。

近世徳川政権の畿内・西国支配の体制については、朝尾直弘氏の「畿内における幕藩体制」と「八人衆による合議体制」⁽⁵⁾が、今もなお優れた研究業績として評価され、「通説化」している。しかしその体制が揃うのは寛永十一年以後である。それ以前の体制は八人衆体制の確立過程ないし整備過程とみるべきなのか、また八人衆体制も永井尚政・五味豊直の死亡、また大坂東町奉行久貝正俊の死後以後補充がなく、なし崩し的に解体しているから、八人衆体制が畿内・西国支配の実効的体制であったといえるのか、そう呼べるのか、また懸案事項について合議した実態はあったのか、など未解決の問題は多いようにみえる。

本稿は以上の問題関心から、二條城の警衛体制の整備過程に焦点を

あてて検証する。

一 二條城の築城と伏見城廃城の経緯

徳川政権の京都支配は慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原後、奥平信昌の京都警固任命に始まる。これは京都市中とその周辺に対する軍事的制圧とその維持を目的とした配置とみられるが、後の記録には、信昌が徳川政権の京都所司代の一人として記載されたり、信昌の下に加藤正次が与力二五騎・足軽五〇人を付属させられて配属されており、後の所司代・京都町奉行を想起させる編成があった⁽⁶⁾。

この態勢は慶長六年九月に「京都の三奉行」と呼ばれる加藤正次・米津勝清・板倉勝重が配置され、同年九月二八日に勝重が名実ともに徳川政権の京都所司代に任命されたことで、所司代と「京都の奉行」二名となる編成のように改められたが、その経緯からみても、慶長五年の奥平・加藤兩人の配置が京都所司代と東西町奉行を中核とした徳川氏による京都と畿内・西国の支配体制整備の契機であり、徳川政権による京都市中の治安・警察機構の嚆矢であろう⁽⁷⁾。

この治安維持部隊の配置と同時に、徳川政権は同六年には二条城築城を始め、八年には天守を欠いたままで当面の普請を終えている。徳川政権は慶長五年以降、伏見城を豊臣氏および畿内・西国支配の軍事的拠点と位置づけたが、それとともに二條城の築造に見られるように、二條城を京都所司代と奉行による禁裏および京都市中と周辺地域の治安・警察、また軍事的行政機構の中核と見なしていたといえよう。築

城時点での二条城の警衛・管理態勢、また二条城を拠点とする京都市中の治安・維持態勢は明確ではないが、慶長八年には板倉勝重のもとに与力三〇騎・同心一〇〇人が配属されており、さきの加藤に付属させられた与力二五騎・足軽五〇人とともに任務に就いていたとみてよい。築城から元和元年（一六一五）の豊臣氏滅亡までは、二條城は軍事的拠点とした伏見城に対して、京都所司代による江戸幕府の禁裏および諸大名に対する儀礼・儀式の場として位置づけられ、伏見城と役割・機能を分担していた。^⑩

この役割分担は寛永元年（一六二四）に伏見城の天守が二條城に移され、伏見城の廃城によって改変されることとなった。以後は二条城が京都・大坂および畿内・西国を統括する中核として機能し始めるが、伏見城廃城の決定は、これよりさき元和五年（一六一九）八月二十九日であった。『徳川実紀』（以下『実紀』）はこの経緯を記す。^⑪

今度伏見城を廃し。伏見在番輩直に大坂へまかり勤番すべしと命ぜられ。松平石見守澄。松平豊後守勝政大坂に赴く。伏見の城内吉野の間を城代内藤紀伊守正信に賜ふ。水野隼人正忠清。松平左近将監成重。伏見大坂へ転換の事を奉行せしむ。伏見の地は山口駿河守直之奉行たらしめらる。（案ずるに重諸家譜には六年とす。元和九年伏見城に於て將軍宣下あり。其後殿閣を淀に下さる由みゆれば。此時いまだ破却せられしにあらず）紀伊守正信は大坂の城代となる。

廃城の決定は大坂夏の陣による豊臣氏滅亡を承けているが、この時点では『実紀』が伏見城での元和九年の將軍宣下を指摘し、「此時い

まだ破却せられしにあらず」と記すように、破却ではなく廃城の決定だけであった。^⑫さらに伏見城代内藤紀伊守正信（家正）が大坂城代に転役したことも注記されており、徳川政権における廃城決定以前の伏見城の位置・役割が知られる。

徳川政権は、関ヶ原以降廃城になるまで伏見城を大坂および西国諸大名に対する軍事的拠点として位置づけていた。慶長六年には西軍の攻撃で落城した城の再建を始め、七年中には完了したとみられる。西国大名らを動員した石垣の築造や本丸殿舎の建造などが同十一年まで続けられ、これに合わせて、六年には大手門の守衛として春日左衛門影定、七年には同じく城の守衛として柘植三之丞清廣を配置している。^⑬

これらを承けて、慶長十二年には城代として松平壱岐守定勝、大番頭として渡邊山城守茂・水野東市正忠光が配置された。再建と、城代・城番・御門番の配置いずれもが伏見城の軍事的役割の強化を示している（表1）。

『慶延略記』は「慶長十二丁未年伏見御城在番初ル」と記しているが、記載形式では、城代よりも

表1 伏見城の城代・城番一覧

| 年次 | 城代 | 城番（大番頭） |
|-------|----------|------------------|
| 慶長12年 | 松平隠岐守定勝 | 渡邊山城守茂・水野市正忠光 |
| 14 | 松平隠岐守定勝 | 松平丹後守重忠・山口但馬守弘隆 |
| 16 | 松平隠岐守定勝 | 阿部備中守正次・高木主水正正次 |
| 18 | 松平隠岐守定勝 | 渡邊山城守茂・井伊掃部頭直孝 |
| 20 | 松平隠岐守定勝 | 松平丹後守重忠・土岐山城守定茂 |
| 元和3 | 松平隠岐守定勝 | 高木主水正正次・阿部左馬助正吉 |
| 4 | 内藤紀伊守正信 | 水野備後守分長・牧野内匠頭信成 |
| 5 | （伏見城代止む） | （伏見在番止む、大坂在番始まる） |

備考：『慶延略記』（内閣文庫史籍叢刊81）による。

大番頭に重点が置かれた記録となっている。¹⁴⁾

慶長十二丁未年伏見御城在番初ル、大番頭兩人組中百人參、組二年番也

同所御城代初ル、

松平隠岐守定勝

(渡邊山城守茂
水野東市正忠光)

これによると、大番頭二名が大番衆一〇〇人を配下として、二年交替で勤務を始めたことになる。同時に城代も始まると記しているが、その記載は大番頭の記事に関する付記(付けたり)である。『慶延略記』は、この後も大番頭在番の交代を記し、元和三年(一六一七)には在番が一年交代になったこと、同五年には、前出の伏見城廃城決定に対応して伏見在番の停止が記されている。¹⁵⁾

徳川政権は伏見城に軍事的拠点の役割を与え、城代・大番頭の常置その警衛態勢を恒常的な態勢として整えていた。大手門守衛などの城番だけでなく、城代・大番頭二名を置いた警衛態勢は臨時的・軍事的な備えとともに、日常的な城の管理・統制にも備えたことをも意味している。この態勢の整備は、慶長六年から八年にかけての二条城の築造と平行して実行されており、徳川政権が両城の役割分担を意識して整えたことを示している。それが二條城の儀礼・式典また禁裏・公家らへの対応での運用、伏見城の大坂豊臣氏や西国諸大名に対する軍事的拠点としての位置づけであった。¹⁶⁾

伏見城の守衛体制は全面的に明らかになっているとはいえないが、前述のように関ヶ原の戦いと落城による城再建後に始まるとみてよい。

この体制を概観しておこう。

伏見城の守衛態勢は、『徳川実紀』等の記す守衛部隊の配置が慶長七年(一六〇二)にあった。また御門番組与力丹羽氏の由緒書にもみられるように、同年、伏見城番春日左衛門影定が与力三〇騎、また柘植三之丞清廣が同心二〇人を配属されて配置されたが、これは関ヶ原役に関連して落城した城の再建が完了したことによる。¹⁷⁾これ以後、さきに触れたように慶長十二年に伏見城代の設置と大番頭の配置があった。

そこで伏見城の警衛態勢を概観すれば、城代を頂点に、軍事部隊として二名の伏見在番が大番組衆一〇〇人(五〇人二組)を指揮し、そのもとで春日は与力三〇騎を預けられ伏見城の大手門を警護、また柘植も鉄炮足軽二〇人を預けられて西の門の守衛にあたった。したがって陣容は、城代・大番頭の家臣団のほか大番衆一〇〇人、春日の家臣団と配属された与力三〇騎、柘植に付属する同心二〇人、合計は家臣団を除けば三〇騎一二〇人が常駐していたことになる。加えて城代・大番頭の家臣団がいた。その実数は不確定であるが、これが守衛態勢の概要であろう。大番頭は一年交代、大番衆は三年交代で、これを「三年番」と称したが、元和三年からはどちらも一年交代になった。¹⁸⁾春日と柘植、および付属する与力・同心の交代はなかった。

伏見城廃城は徳川政権の京都および畿内・西国支配における伏見城の役割の変更を示している。その重要な要因が軍事的拠点としての役割の変化で、豊臣氏滅亡を契機とし、二條城や大坂城という新たな拠点の確立と関連している。家康が駿府城に拠点を移し、京を離れたこ

とが伏見城の軍事的役割を減退させたという見方もあるが、主要因はあくまでも大坂・畿内および西国の軍事的緊張の緩和、克服にあったといえよう。⁽²¹⁾

徳川政権は豊臣氏滅亡後、大坂に松平忠明を配置して戦後処理に当たらせ、元和五年に大和郡山に転封して大坂を直轄地とし、大坂城代・大坂町奉行を設置した。このとき伏見城代であった内藤正信（家正）が元和五年七月二二日に初代大坂城代に転任させられたこと、また同年から大番頭二名による大坂在番が始まったことは、伏見から大坂への軍事的拠点の移動およびその役割の変更を示している。これに加えて、大坂町奉行のほか南都（奈良）奉行・堺奉行、伊勢山田奉行また長崎奉行等の遠国奉行衆の配置があったことも、伏見城の軍事的役割や地域支配における役割を減退させた要因であろう。

元和六年以降には西国外様諸大名を動員した大坂城の再建も進められ、九年にはほぼ完了している。徳川政権の畿内・西国支配のなかで実質的な役割を失った伏見城の存続の意味がさらに失われたといえよう。この結果が寛永元年（一六二四）の伏見城天守の二條城移築と伏見城の破却である。⁽²²⁾

二 二條城の守衛体制の整備

（一）伏見城番の二條城移動

二條城の守衛体制は、伏見城廃止に伴って伏見城から移った守衛部隊によって形成されている。『慶延略記』『江城年録』『寛明日記』な

ど幕府の日記によると、伏見城大手門など守衛の春日左衛門と柘植三之丞が配属の与力・同心とともに二條城に移っている。弘化二年（一八五）に作成された二條城御門番組与力丹羽健次郎の由緒書にはこの経緯が記される。健次郎はこのとき御門番組頭三輪清右衛門組の与力で二十二歳、父次郎右衛門の養子であったが、その先祖丹羽金右衛門の項に、春日左衛門配属の与力として召し出されたこと、次いで二條城御門番組与力となったことが記されている。⁽²³⁾ 該当部分をあげておく。

一先祖

丹羽 金右衛門

先祖丹羽右近大夫氏識十三男二御座候処、

権現様御代慶長七寅年與力被 召抱、伏見御城番春日下総守支配

ニ而伏見御城御番相勤、寛永元年伏見御城御天守当二條江被為

移候二付、同二丑年月日不知当二條江御引越、春日左衛門支

配ニ而御城東追手門御番相勤、同年病氣二付忝三右衛門江番代奉

願、正保四亥年十一月廿二日病死仕候、

ここには丹羽氏が伏見城守衛の時点から与力であったことと、伏見城天守の二條城移転、それに伴う二條城守衛部隊への移動が確認できる。二條城の役割が伏見城の役割・機能の引き継ぎと肩代わりであったことの証左でもあろう。

また『江城年録』には寛永二年（一六二五）四月二日のこととして、渡邊茂の二條定番任命と「伏見定番衆」のうちから春日・柘植の二條定番への移動を記している。これには御藏奉行二人の二條城への移動も記されている。⁽²⁴⁾ 蔵奉行の役職が軍事的な意味合いを持つ城内詰米の管理および城番衆や与力・同心他への給米管理であることを考えると、

伏見城廃城によって二條城の役割に軍事的な要素が付加されたことになる。伏見城守衛与力・同心の配置転換はこの変化の現れの一つであった。

春日は伏見城では大手門守衛、柘植は御門番頭であったが、二條城へ移動後はいずれも御門番組として春日（春日組）は東大手門、柘植（柘植組）は西御門の御門番となった。これも伏見城の守衛箇所と同じである。春日・柘植の移動については、後の二條城御門番組柘植組の与力丹羽氏による記録『御組由緒記』があり、経緯を記しているので、該当部分から経緯をみよう。

『御組由緒記』は柘植組の祖としての柘植三之丞の事績を辿りながら、御門番組の由緒を述べている。記録は、本能寺の変によって窮地に陥った家康の「伊賀越」を助成した柘植一族の勲功と柘植三之丞の関ヶ原出陣、それらによって柘植三之丞および柘植の郷士らが伏見城番に取り立てられたことから始まっている。三之丞が関ヶ原の戦功で三〇〇石を拝領したこと、さらに二〇人の同心を預けられたこと、その二〇人が柘植の朋友であったことなど柘植組の発端が記されている。さらに「伏見 御城御番被為 仰付相勤」として、伏見城では柘植三之丞は御門番頭、春日は御定番、城代は山口駿河守と記されている。⁽²⁵⁾

| | |
|------|--------|
| 御城代 | 山口駿河守殿 |
| 御定番 | 春日下総殿 |
| 御門番頭 | 柘植三之丞殿 |

其後寛元⁽²⁴⁾甲子年御城京都二条江被為移、西之御門御番所相勤也、

御組式拾人罷在候御長屋者伏見 御城之内百間御長屋之内表被為引表御長屋六軒奥御長屋十四軒御建被下置、御城内御破損御奉行御見分有之、累年御修覆被為 仰付、元禄五⁽²⁵⁾申年御番頭酒井右京亮殿一柳土佐守殿御在番之節迄御修覆有之、其後ハ相止候也、
『実紀』等の記録を参照すれば、城代は松平隠岐守定勝であり、山口駿河守は伏見の奉行と見られるので、山口を城代としていることは誤りであろう。

記録では御門番組は寛永元年に二條城に移され、「西之御門御番所相勤也」とある。また同心二〇人の住居も伏見城の百間長屋のうちの表長屋と呼ばれた部分を引き移して、表長屋六軒と裏長屋一四軒として建造したとしている。長屋の修復は御破損奉行の見分を受けて行われ、元禄五年まで継続されていた。当初からの柘植組（またその系統）は、元禄十二年の再編成まで寛永二年以後の同心を中心に西御門番組として努めている。

（二）二條城代の設置と廃止

寛永二年（一六二五）二月四日、徳川政権は二條城代に渡邊山城守茂を任命した。表1にもみられるように、渡邊茂は伏見城在番の最初の大番頭の一人でもあった。『慶延略記』はこの年の二條城普請の成就と御城番の開始を記している。⁽²⁶⁾

京都二条御城番初ル、今年御普請成就

御城代渡邊山城守茂被仰付、大御番衆卅人ツ、山城守仕配ニて勤、是卅人番といふ、御番衆一年代勤番、御城代同心卅人有之、御本

丸高麗御門にて番努、此外春日左衛門与力卅騎大手御門番勤、柘植三之丞同心廿人西丸御門番努、是ハ号伊賀衆

普請は天皇行幸に備えるためであつたが、『実紀』は「大番頭渡邊山城守茂二條城の定番を命ぜらる」と『慶延略記』および『江城年録』からの記事をもとに掲げ、伏見城の警固に当たっていた伏見定番春日左衛門・柘植三之丞の移動も記している。²⁷『江城年録』も、寛永二年四月に二条定番として渡邊茂と春日左衛門・柘植三之丞が任命され、渡邊茂の知行が七〇〇石、春日が一七〇〇石、柘植が三〇〇石であつたことと、与力や同心および伏見城の御蔵奉行二名も二條城に移つたことを記している。²⁸

一渡邊山城守二条之定番被仰付、知行七千石、伏見定番衆之中春日左衛門知行千七百石、柘植三之丞三百石、其外御蔵奉行二人伏見より二條江移、春日左衛門与力三十騎ニ而同心無之、柘植三之丞ハ歩行同心二十人、預与力無之、

また、『寛明日記』には、寛永二年四月の記事として「京都二條城構宮事就二大番以渡邊山城守茂為守衛」ト、春日下総・柘植三之丞自「伏見城移」ル、二条城且大番ノ諸士令ニム勤番」とあり、伏見城からの天守の移築とその普請後に二条城定番の設置があつた。

この時点では、二条城城代は二条城守衛体制の軍事的指揮官として位置づけられていたといえよう。その城代としての守衛態勢は渡邊山城守が大番頭であつたことから、「大御番衆卅人ツ、山城守仕配ニて勤」とあるように、大番組配下の大番衆三〇人二組を配下として、さらにこれに加えて「御城代同心卅人有之」と記しているように、城代

に付属する同心三〇人も配下として二條城の守衛にあたつた。

伏見城在番の態勢がそのまま二條城に移されており、二條城代配下の大番衆は「三十人番」と呼ばれていた。この城代・大番衆・御門番等の配置は、伏見廃城によつて二条城が儀礼・儀式のみならず、畿内・西国の支配行政の中枢として位置づけられ、また軍事的拠点の役割を与えられたことを示している。

ところで、二條城代は元禄十二年まで存在していたとされる。たとえば『国史大事典』は寛永二年の城代設置と元禄十二年の城代職廃止について解説するが、城代職は元禄十二年（一六六九）になつて廃止されたが、職務そのものは同じく寛永二年に設置された二条城番に引き継がれた」としている。²⁹この解説は、寛永二年の御城番の開始を大番頭と大番衆による勤番と解釈しているが、『慶延略記』『江城年録』また『実紀』等の記述から判断すると、寛永二年には大番頭渡邊茂の城代就任とその下での大番衆三〇人二組による勤番を記し、城代の指揮下で三〇人二組の大番衆が在番していることを記しているので、元禄十二年の城代職廃止によつて職務が二条城番に引き継がれたわけではない。つまり寛永二年に設置された二条城番は城代とその配下に大番衆三〇人二組が当てられた在番であつて、いわゆる大番組の大番頭と大番衆による在番の城番ではない。

確かに城代のもとに同心三〇人が付属する事態は大番組大番頭の役職に対応するように見えるが、渡邊茂が寛永十二年に職を解かれるまで交代がなく、伏見城番や大坂城番等の大番頭とは意味合いが異なっている。また渡邊茂は元禄十二年まで城代職を勤めていたわけではな

表2 二條城の城代・大番頭一覧

| 年次 | 城代 | 城番（大番頭） |
|------|--------|-------------------|
| 寛永2年 | 渡邊山城守茂 | |
| 12 | 渡邊山城守茂 | 保科弾正忠正貞・安部摂津守信盛 |
| 13 | (廃止) | 皆川山城守隆広・大久保右京亮教隆 |
| 14 | | 松平外記忠実・植村出羽守家政 |
| 15 | | 水野備後守元茂・北条出羽守氏重 |
| 16 | | 植村出羽守家政・松平外記忠実 |
| 17 | | 保科弾正忠正貞・内藤石見守信広 |
| 18 | | 皆川山城守隆庸・大久保右京亮教隆 |
| 19 | | 松平外記忠実・堀越中守利長 |
| 20 | | 水野備後守元矩・安部摂津守信盛 |
| 正保元 | | 中根大隅守正茂・本多豊前守正重 |
| 2 | | 田中主殿頭定臣・稲垣若狭守重太 |
| 3 | | 内藤石見守信広・保科弾正忠正貞 |
| 4 | | 松平外記忠実・植村帯刀 |
| 慶安元 | | 石川播磨守総長・堀越中守利長 |
| 2 | | 植村帯刀・松平丹後守勝随 |
| 3 | | 中根大隅守正成・本多豊前守正重 |
| 4 | | 田中主殿頭定臣・池田帯刀長治 |
| 承応元 | | 松平外記忠実(死)・高木主水正正弘 |
| 2 | | 石川播磨守総長・堀越中守利長 |
| 3 | | 松平丹後守勝随・植村帯刀 |
| 明暦元 | | 岡部丹波守長賢・松平豊前守勝茂 |
| 2 | | 中根大隅守正成・本多豊前守正重 |
| 3 | | 大久保右京亮教勝・池田帯刀長治 |
| 万治元 | | 高木主水正正弘(死)安藤伊賀守重光 |
| 2 | | (代)松平左近大夫乗真 |
| 3 | | 加々爪甲斐守正證・戸田淡路守氏知 |
| 寛文元 | | 松平外記伊雄・植村帯刀 |
| 2 | | 岡部丹波守長賢・松平豊前守勝茂 |
| 3 | | 中根日向守・本多豊前守 |
| 4 | | 松平右京亮教隆・池田帯刀長治 |
| 5 | | 安藤伊賀守重光・松平左近大夫乗真 |
| 6 | | 戸田備後守重鮮・戸田淡路守氏知 |
| 7 | | 松平外記伊雄・板倉市正重太 |
| 8 | | 岡部丹波守長賢・松平豊前守勝茂 |
| 9 | | 中根日向守正勝・高木主水正正盛 |
| 10 | | 大久保右京亮教勝・水野周防守忠増 |
| 11 | | 内藤若狭守重頭・田中大隅守定格 |
| 12 | | 戸田備後守重鮮・本多伯耆守正盛 |
| 延宝元 | | 酒井伊豫守正次・植村土佐守忠朝 |
| 2 | | 岡部丹波守長賢・武田越前守信貞 |
| 3 | | 板倉伊豫守重形・戸田相模守氏好 |
| 4 | | 三枝摂津守守俊・土屋兵部少輔元直 |
| 5 | | 永井信濃守尚包・田中大隅守定格 |
| 6 | | 松平縫殿頭乗次・本多内匠頭忠豊 |
| 7 | | 酒井伊豫守正次・植村土佐守忠朝 |
| 8 | | 堀田対馬守正英・武田越前守信貞 |
| | | 板倉伊豫守重形・酒井下総守忠長 |

備考：『慶延略記』（内閣文庫史籍叢刊81）による。

い。寛永十二年以後の二条城代任命はなく、『慶延略記』『実紀』等の記事でも確認することはできず、『慶延略記』も『実紀』も寛永十二年からの大番頭・大番組二組大番衆の在番による守衛管理を記す。『実紀』には寛永十二年五月二三日の条にこれを記している^③。

大番頭保科弾正忠正貞。安部摂津守信盛二條在番の暇下さる。これは二條城代渡邊山城守茂二條より帰るにより。この輩これにかへられ。各所属の番士五十人づゝひきつれてまかる。これ二條在番交替の濫觴とぞ。

前出の『慶延略記』や『実紀』の記事を勘案すると、渡邊茂の二條定番配置と「二條城代」の就任およびその解職を「二條城代渡邊山城守茂二條より帰る」と記し、解職に伴う大番頭の配置を「二條在番代の濫觴」と記している。

また『慶延略記』には、寛永十二年の大坂在番水野備後守元総・内藤石見守信廣に続き、渡邊茂の二條城城代の「御赦免」と二條城在番が記され、二條城では大御番頭二名と大御番衆一〇〇人（五〇人宛）による在番が始まったと記している。その最初の大番頭は保科弾正忠

正貞・安部摂津守信盛であつた。³²⁾

二条御城代渡邊山城守茂御役御赦免、従は大御番頭兩人組衆百人
二条在番初ル、

保科弾正忠正貞

安部摂津守信盛

この後、『慶延略記』は毎年交替した大番頭を載せているが、延宝八年までの一覧は表2のようであつた。

以上によると、二條城の城代は寛永二年に置かれ十二年に廃止されたこと、同年からは「二條在番交代の濫觴」と記すように大番頭・大番衆による守衛となつたことが確かめられる。同時に、城代職の職務は元禄十二年から寛永二年設置の城番に引き継がれたのではなく、寛永十一年までは城代渡邊茂が配下の三〇人二組の大番衆と同心三〇人を指揮して遂行し、寛永十二年以降は新規に設置された大番頭・大番衆五〇人二組に引き継がれたのである。

三 二條城守衛体制の確立

(一) 御門番組と与力・同心の編成

二條城御門番組は東大手門の春日組と西御門の柘植組の二組であつた。寛永二年（一六二五）の伏見城から移動直後は城代と大番衆の態勢のもとで春日組・柘植組と呼ばれ、番所も東大手門と西御門に固定されていた。与力・同心の配属数も均等ではなく、当初は「春日左衛門与力三十騎ニ而同心無之、柘植三之丞ハ步行同心二十人、預与力無

之³³⁾」という状態であつた。その態勢が元禄十二年（一六九九）に至つて再編成され、与力一〇騎と同心二〇人に均等化された。以後はこの定員が徳川政權期を通じて維持されることになる。

元禄十二年以後は表3に示した与力・同心の人員構成で、二條城の大手門（東御門）・西御門・北御門三つの門を守衛し、城門出入の管理を職務とした。城郭が軍事的拠点であるとすれば、侵入者を予防的に排除するという意味から、大番頭・大番衆とともに二條城の軍事的警衛態勢の重要な一翼であつたといえよう。したがつてその番組編成の整備過程は二條城の守衛体制確立を検証するうえでの指標となる。

御門番組の元禄十二年までの編成と変化について、『御組由緒記』は寛永元年以降の変遷を記している。これには柘植組の同心の編成が、寛永元年は渡邊山城守が城代就任を告げられた年次と考えられるが、二條城での勤務は同二年からである。その直後の柘植組の同心は二八人になつたが、その経緯が述べられている。³⁴⁾

一寛永元 子年渡邊山城守殿二條御城代被為 仰付、御組同心三拾人被召連御登在勤也、同十二乙亥年 御城代相止、山城守殿江戸江御「ムシ」組ハ同十三丙子年御番頭□□摂津守殿・保科弾正殿御支配ニ而西之御門御番所相勤也、右三拾人之者十二人大坂御材木方江被為 仰付、拾人ハ御鉄炮奉行組、残り八人ハ寛永十九壬午ノ年柘植三之丞殿御組江被為加江、従是北御組式拾八人ニ而相勤也、

但山城守殿御在勤之内ハ江戸ハ三拾人宛在番有之、一ヶ年切ニ交代之由、右三拾人番衆之小屋御本丸高麗御門堀際ニ有之

表 3 二條城与力・同心一覧(宝暦 9 年)

| 金田仁十郎組 | 大岡金兵衛 |
|--|---|
| 与力 金 原 政 之 丞 内 藤 金 右 衛 門 丹 羽 亦 十 郎 関 戸 久 之 丞 内 藤 勝 之 進 渡 邊 儀 右 衛 門 鈴 木 要 助 小 倉 兵 橘 野 条 佐 五 衛 門 藤 田 彦 十 郎 | 与力 城 武 之 進 早 苗 縫 之 丞 鈴木小野右衛門 佐 治 長 兵 衛 須 加 井 亮 助 村 田 権 太 兵 衛 中 川 仲 之 助 岡 山 儀 左 衛 門 藤 田 武 藤 太 藤 井 太 右 衛 門 |
| 同心 小 嶋 藤 藏 法 貴 [] 安 井 早 太 木 寺 新 五 右 衛 門 大 西 八 之 丞 山 田 甚 五 兵 衛 三 浦 儀 兵 衛 青 木 清 藏 服 部 弾 治 木 寺 伴 内 川 勝 源 藏 喜 多 利 大 夫 桂 林 之 進 磯 野 久 兵 衛 竹 内 茂 右 衛 門 小 嶋 政 右 衛 門 柘 植 清 五 郎 有 馬 幸 介 於 氣 庄 兵 衛 松 原 与 左 衛 門 | 同心 井 上 儀 右 衛 門 向 井 佐 右 衛 門 林 源 左 衛 門 山 田 沢 右 衛 門 田 邊 大 助 土 肥 次 郎 右 衛 門 中 嶋 彦 六 郎 井 上 平 助 飛 松 久 右 衛 門 乾 善 四 郎 山 田 角 右 衛 門 小 原 弥 左 衛 門 山 崎 清 兵 衛 小 原 左 平 太 原 田 市 右 衛 門 祓 藤 助 永 野 安 左 衛 門 松 植 金 藏 宮 川 利 右 衛 門 |

備考：『京都武鑑』（表 3 と同じ）による。

ト傳也、是又山城守殿駿府⁶二條御城代被為 仰付之由、右御組三拾人ノ同心罷在候小屋ハ伏見御城内之中御長屋ヲ被為引被下置旨被為 仰付之由、又曰寛永十一 甲戌年家光公御上洛アリ、山城守殿御願被仰上候ハ柘植三之丞組私組御奉公筋甲乙無御座候得者三之丞組並ニ御扶持切米可被下置之旨御願上候処、（下略）

これによると、さきに触れたように二條城代は寛永二年から寛永十二年までであったこと、その後は十三年から大番頭と大番衆による番制になったことが確かめられる。渡邊山城守城代のときには大番衆は三〇人宛で二組あり、一年交替で三〇人番制と呼ばれていたが、これが城代廃止によって、大番頭二名と大番衆五〇人宛の一年交代制に変わった。その小屋は本丸高麗御門堀際にあったが、これも御門番組と同様に伏見城御長屋から引き移した小屋であった。

また城代の廃止によって、配属同心三〇人も配置換えされた。その内訳は、一二人が大坂材木方（大坂川崎）、一〇人が二條城御鉄炮奉行組、残る八人が寛永十九年に柘植組へ加えられた。³⁵ また延宝四年（二六七六）に、このときの頭水野甚五左衛門の願によって西御門番組へ与力六騎が東大手門番組から移され、与力六騎と同心二八人の組編成となっている。³⁶ これによって、柘植組は延宝四年までは「往古與力者無御座候」という組編成から、与力六騎と同心二八人の態勢で西御門番勤務が元禄十二年まで続くことになる。

また春日組の編成は寛永二年二條城移動直後に、与力三〇騎に加えて新たに同心一五人が召し抱えられ、与力・同心による組編成となった。³⁷

大猷院様 御代寛永元甲子年伏見 御城御天守当^{（欠マ、欠字ノイミカ）}二條江被為 移候、其節春日下総跡御役嫡子春日左衛門江被為 仰付候、三拾騎之與

力共者翌乙丑年当二條江引越、春日左衛門支配ニ而当二條 御城東追手御門御番相勤申候、此時左衛門〇差図ニ而與力三拾騎惣御切米現米式千石之内現米式百石被相分、同心拾五人被召抱、御切米拾三石六斗宛ニ而下番相勤申候、右拾五人之同心家筋之者共六人者今以御扶持方無御座、拾三石六斗宛拝領仕罷在候、当時久留半次郎組筋往古頭曲淵市太夫支配之内貞享三丙寅年夏御借米拝領之節者御取御証文ニ茂御預之與力与書被認候、同年冬御切米之節与御預之与力・同心与相改申候、

二条城東追手門番は、慶長七年に伏見城番として春日影定が与力三〇騎を付属されて設置されたことに始まるが、寛永二年に影定嫡子春日左衛門が跡役として移った。その際に、与力に加えて同心一五人を召し抱えたところ。その際に、与力三〇騎の切米二千石から二百石を分けて一三石六斗宛が与えられたが、今に至るまで（由緒記は宝暦五年作成）、新規の同心一五人の系譜を引く六人には扶持米は支給されていないと記している。

組編成は、前述のように延宝四年に西御門番組に与力六騎を移動させたために、与力二四騎と同心一五人の編成となっている。これも影響しているとみられるが、曲淵市太夫支配の貞享三年（一六八六）からは証文類には「御預之与力」（御預けの与力・同心）と署名するようになったと記されている。これは伏見城番当初の与力三〇騎が春日影定の家臣団と同等の処遇であったことを窺わせる。³⁸

（二）元禄十二年の御門番組改変

寛永十二年（一六三五）の二條城代廃止後の警衛体制は大番頭・大番衆を頂点に、そこに配属された同心および東西の御門番組によって維持された。城代廃止後の二條城の管理態勢については不確定な部分があるが、『御組由緒記』は御門番組ほか二條城の支配が寛永十一年は所司代支配、十二年から十三年にかけては大番頭支配であったとしている。³⁹ 寛永十一年は家光上洛の年で、二条城代の停止と所司代の管理委任もこれに関連して、その上洛の完了を見た上で発令されたとみられる。寛永十二年から十三年にかけては、『実紀』が「二條在番交替の濫觴」と記すように、城代のもとで大番衆が勤務していた状態からの転換に関する調整上のことがらであろう。

これ以後は二條城守衛の中核は城代に替わって二人の大番頭と二組の大番衆が担うことになる。大番組一二組のうちから二組が毎年四月に交替の一年交替で努め、これを二條城番と呼ぶようになった。その編成は大番組頭と組頭四名、組衆（大番衆）五〇人を一編成とした月番制であった。このもとにもそれぞれ与力一〇騎と同心二〇人（総計二〇騎同心四〇人）が配属されていたが、詳細は不明である。そのほか二條城には蔵奉行・鉄炮奉行・御殿掃除方などが在番し、東大手門と西御門に御門番組が勤務していた。⁴⁰

さきに触れたように、東西の御門番組の与力・同心の編成は寛永二年（一六二五）・寛永十九年・延宝四年（一六七六）に増員や編成替えによって変動している。それが元禄十二年に至って東西それぞれ与力一〇騎と同心二〇人に固定される。元禄十二年の御門番所機構の改

変は与力・同心の人員整理（減員）と配属替えであった。東大手門と西御門の二つの組が与力一〇騎と同心二〇人に均等化され、勤務態勢も東西の御門番組対等、同格になったことであった。

その経過をみると、前述のように、二條城移動直後は伏見城番のまま春日組と柘植組として配置転換されただけで、春日組与力三〇騎と柘植組同心二〇人という不均衡な人員編成であった。このため寛永二年に春日組に同心一五人が新たに編成され、与力三〇騎と同心一五人の態勢となった。一方の組は与力と同心、他方は同心のみという態勢は二條城代の廃止される寛永十二年まで続いたとみてよい。

それが二條城代の廃止によって、城代配属の同心三〇人の配置転換に伴う人員編成の変化があった。御門番組の編成をみると、西御門番組に寛永十九年に城代同心八人が組み込まれ、総数は二八人となったが、同心のみという態勢は変わらなかった。これが警衛体制にとって是不備と見えたのか、延宝四年になって、この時点での西御門番組頭であった水野甚五左衛門の願によって、東大手門番組から西御門番組へ与力六騎が移され、西御門番組は与力六騎と同心二八人の組編成となった。この態勢が元禄十二年まで続くことになる。

この経緯について、『御組由緒記』は西御門番組は初めは同心二〇人で、「三之丞御組者最初式拾人也、八人ハ御城代之御組ヲ加里式拾八人ニ成」と、二八人となったのは二代目柘植三之丞宗次の代のことと記している。これは家光の代寛永十二年に拝借金を同心二八人が一〇年賦で二六〇両を拝借し、正保元年（一六四四）までの八ヶ年分を毎年上納してきたこと、残りは二ヶ年分は寛文六年（一六六六）まで

に上納皆済となったという記事に付けられた但し書で、城代配下の同心八人の移動によるものと明記している。

元禄十二年の御門番組の改変は御城番という名目を廃止し、両組の不均衡を是正することであった。これも『御組由緒記』に記される。^④

常憲院様 御代元禄十二己卯年御所司代松平肥後守殿御在役之節、當時久留半次郎御組筋往古頭山岡七右衛門儀者御役替被為 仰付未在京之節、其節当御組頭鈴木市兵衛儀者御役御先ニ而御組共山岡七右衛門從支配之節、両御組與力都合三拾騎、同心都合四拾三人之内與力拾騎・同心三人勤之年数を以御減少被為 仰付、相残候與力式拾騎・同心四拾人を與力拾騎・同心式拾人宛平均ニ而御組与被為御定分、御城東西御門番所十日代りニ相勤候様ニ被為 仰付、御城番之名目此節ヲ相止、両頭無差別同格ニ御門番頭与被為 仰付候、両御組之儀者御譜代同前ニ被為 思召上候段、松平肥後守殿被仰聞候間、此後人少ニ茂罷成候得者猶以御奉公大切ニ相勤候様ニ山岡七右衛門被申渡候、右七右衛門跡御役美濃部彦左衛門、当御組之頭鈴木市兵衛跡御役柘植三之丞同時ニ御役被蒙仰被致上京、與力拾騎・同心式拾人宛支配ニ而東西御門御番所十日代りニ相勤申候、今以右之通相勤罷在候、

但右之通御組分御座候迄者與力御切米高不同御座候处、此節ハ両御組式拾騎之與力御切米高平均ニ被為 仰付候ニ付、壹人前ニ現米六拾壹石三斗五升宛拝領仕来候、

御門番組の編成は、延宝四年の改変で東大手門番組が与力二四騎、同心一五人、西御門番組が与力六騎、同心二八人という編成となつて

いた。両組を合わせると、与力が三〇騎、同心四三人の人員となる。これをそれぞれ与力一〇騎と同心二〇人の均衡した二組とするために、与力一〇騎と同心三人を削減する必要があった。「勤之年数」が減員対象者の区分基準であった。

記録によると、組編成を均等にする事で、両組が東西の番所を一日ごとに交替して勤務すること、御城番の名目を廃止、両組の頭を同格にして「御門番頭」とすること、それに両組を「御譜代同前」（御譜代並）に処遇することなどに改変された。これらは、人員の均等・組の同格、呼称の変更また勤務場所の平準化など、いずれも旧来の由緒や来歴、出自に従った待遇や勤務形態ではなく、御門番という役職・業務の合理的な遂行の専従者として、専門の官僚的役人（吏僚）として位置づけるための改変であったといえよう。それは「此節は両御組式拾騎之與力御切米高平均ニ」現米六一石三斗五升となったとあるように、「組分」以前は与力個々に「不同」があった切米高の平均化が図られていることも、その現れであろう。

この変化は二條城を中核とする京都・大坂および畿内・西国の支配体制の確立と関連しているとみてよい。京都・二條城に関しては、寛永二年の城代設置、同十二年の城代廃止、また寛文八年（一六六八）の伏見奉行からの転任による東西京都町奉行の創設があり、天和から元禄期にかけての幕府勘定所機構の改変、各地代官の肅清と吏僚派代官への置き換え、さらには大坂・京都町奉行にかかわる機構改革と関連している。元禄十二年という年次も、これらの大きな改変が一応決着する時期でもある。

御門番組の改編は二條城警衛態勢の整備では最終段階にあった。二條城警衛体制の確立という観点からみると、東西御門番組の再編成はその確立を示しているといつてよい。表3は宝暦九年（一七五九）の御門番組与力・同心の一覧であるが、元禄十二年の再編成によって均等化された状態を示している。宝暦五年（一七五五）の時点で、「今以右之通相勤罷在候」と記すように、これ以後御門番組を含め、二條城関連の大きな制度改変は徳川政權の消滅までなかった。

（三）減員与力・同心の転任状況

御門番組の勤務実態については、別の機会に譲るが、ここで残る問題は、定員削減による与力一〇騎と同心三人の処遇である。この点を『御組由緒記』によりながら検証しておきたい。『御組由緒記』は「常憲院様 御代」のこととして、減員の対象者の選定は「勤務之年数」であったことと、この年からの勤務形態の変化や給米のことを記した後に、一〇騎三人の減員とその後の経過を記している⁴⁵。

一段ニ奉申上候御減少之與力拾騎同心三人之者共者山岡七右衛門江戸御表江帰着之上、両御組由緒を以御願被申上、翌辰年迄二諸御組ニ御入人被為 仰付候、其砌於御殿中 御老中様方山岡七右衛門元組之儀者御譜代同前ニ被為 仰付候段被仰渡之旨七右衛門元御組與力共江被申越難有奉存候、無懈怠御奉公仕候者共代御番奉願候節者願之通被為仰付被 下置、或者悻幼年ニ御座候而御奉公難相勤者御座候節者宥抱被為 仰付、万一宥抱人不意之儀茂御座候得者再宥抱等被為 仰付、御奉公相続仕

難有奉存候、但御減少之与力拾騎之内三人貞享年中御組ニ明キ御座候節、右明跡之儀者死失後代御番可奉願親類并御組内ニ御奉公可相勤頃立候者無御座候ニ付、江戸御表御手鷹匠、平御勘定、火之御番御切米者自分拝領高ニ而御入人ニ被為 仰付候者共ニ御座候、依之御減少之節右三人之者共者江戸御表へ被召出候、

これによると、一〇騎と三人の行先は組み替えの時点で頭山岡七右衛門・鈴木市兵衛が御門番頭であつたが、東大手門番組頭の山岡七右衛門が江戸表へ帰着したときに願いを出し、翌年の元禄十三年（一七〇〇）までに「諸組ニ御入人」となつたとしている。その際に元組の与力は「御譜代同前ニ被為 仰付候段被仰渡」たとある。寛永二年（一六二五）以来の御門番組の与力が譜代と同じに処遇されるという認可を得たわけである。

減員となつた一〇騎の与力は、三人が貞享年中（一六八四〜八八）に組の明き跡へ江戸の御手鷹匠、平御勘定、火之御番から元の給米のまま「御入人」となつた者で、減員によりまた江戸に召し出されたと記している。また組を外されて牢人し元組（柘植組）に戻つた与力が二人いた。表4に示したように、鈴木氏と野条氏である。野条氏の由緒書の該当部分を掲げる。⁴³

一祖父

野条 小左衛門
常憲院様 御代元禄九丙子年正月 御所司代小笠原佐渡守殿御在役、
頭山岡七左衛門支配之節父野條忠右衛門跡代番被 召出、同十二
己卯年迄四年相勤申候処、同年六月御所司代松平紀伊守殿御在役、

頭山岡七右衛門支配之節組人数減少被為 仰付御暇被下牢人仕、
江戸御表諸御組割入奉願候処、被為 聞召届、翌庚辰ノ年三月
御所司代松平紀伊守殿御在役、頭柘植三之丞支配之節当組へ割入
被為 仰付、享保八壬卯年同心支配役被申付、同十一丙午年迄前
後三拾壹年御奉公相勤、同年九月病死仕候、

ここには野条氏が元禄十二年六月に人数減少のために「御暇」となり「牢人」したこと、江戸表の諸組へ割り入れを願つたが、翌十三年三月になつて元の柘植組に欠員があつたので復帰したことが記されている。この点は鈴木氏も同様で、由緒書では野条氏と同じ文言で江戸表への諸組割り入れ願いの後に、元禄十二年六月に牢人、同年十一月に復帰したことを記している。

減員の対象者は勤務年数によつていて、確かに元禄十二年の時点で組入が最も新しい与力は野条氏と鈴木氏であつた。野条氏は延宝四年（一六七六）に忠右衛門が抱え入れられて、元禄九年に小左衛門が相続し二代二五年間の勤務、また鈴木氏は延宝元年の抱え入れで、元禄十二年まで二七年間の勤務であつた。表4に見られるように、最も由緒のある与力は寛永二年から続く丹羽氏で、丹羽氏は伏見城春日組の慶長七年（一六〇二）からの勤務であつた。最も新しい与力は内藤勝之進の元文二年（一七三六）である。

残る与力五人については不明であるが、内三人の同心が減員と同時に伏見奉行建部内匠守政字組へ割り入れられているので、同様に江戸表か近隣または他の役所与力に組み入れられたと推測される。

この再編成の結果、以後は一組一〇騎二〇人態勢で、二組で東西御

表4 二條城西御門番組与力の系譜

| | |
|--|--|
| <p>丹羽亦十郎 寛永2年一宝暦5年 131年 寛永2年 三右衛門(高祖父) 承応2年 学兵衛(曾祖父) 元禄13年 覚兵衛(祖父) 享保8年 熊右衛門(父) 享保20年 亦十郎(養子)</p> <p>藤田彦十郎 寛永7年一宝暦5年 125年 寛永7年 奎右衛門(先祖) 万治1年 八兵衛(高祖父) 貞享3年 源四郎(曾祖父) 元禄5年 儀左衛門(祖父) 宝永4年 儀左衛門(伯父) 享保1年 丈之助(父) 寛延3年 源之進(兄) 宝暦3年 彦十郎(養子)</p> <p>関戸久之丞 寛永15年一宝暦5年 118年 寛永15年 次郎兵衛(曾祖父) 万治1年 市助(祖父) 元禄4年 直右衛門(父) 正徳2年 小野田宇右衛門(異父) 享保10年 常八(兄) 享保20年 久之丞</p> <p>小倉兵橘 寛永16年一宝暦5年 117年 寛永16年 弥左衛門(高祖父) 正保3年 十右衛門(曾祖父) 元禄4年 浅右衛門(祖父) 享保4年 源八郎(父) 寛延4年 兵橘</p> | <p>渡邊儀右衛門 万治1年一宝暦5年 98年 万治1年 勘右衛門(高祖父) 万治3年 勘右衛門(曾祖父) 養子(貞享3年)不行跡再勤(元禄3年まで) 元禄3年 勘右衛門(祖父) 享保20年 一学(父) 寛保1年 勘右衛門</p> <p>金原政之丞 寛文五年一宝暦五年まで 95年 寛文5年 佐五右衛門(祖父) 元禄3年 嘉兵衛(父) 享保5年 政之丞</p> <p>鈴木要助 延宝1年一宝暦5年 83年 延宝1年 四郎右衛門(祖父) 元禄12年6月牢人 同年11月当組へ割入 正徳1年 八郎右衛門(父) 享保18年 文左衛門(兄) 寛延3年 要助</p> <p>野条佐五右衛門 延宝4年一宝暦5年 80年 延宝4年 忠右衛門(曾祖父) 元禄9年 小左衛門(祖父) 元禄12年6月牢人 13年3月当組へ割入 享保11年 貞之進(父) 延享3年 泰次郎(再従弟) 宝暦3年 佐五右衛門</p> <p>内藤金右衛門 享保9年一宝暦5年 32年 享保9年 金右衛門(父) 享保16年 金右衛門(養子)</p> <p>内藤勝之進 元文2年一宝暦5年 19年 元文2年 勝之進(加藤弥五左衛門明跡へ新規)</p> |
|--|--|

備考：丹羽氏文書と『京都武鑑』（『叢書京都の史料』7 京都市歴史資料館、平成15年）による。

門番所十日交代で勤務することとなった。しかも両組同様に御門番勤頭、両組「御譜代同前」という処遇となり、それまでの春日組・柘植組という呼称はこの時点で用いられなくなったが、由緒記では元禄十二年以後でも旧来の呼称で記されている場合がある。

おわりに

京都および上方八ヶ国・西国支配体制の確立は慶長五年（一六〇〇）以後京都所司代と伏見城を拠点に展開されたが、慶長五年から豊臣氏滅亡までとその後元和元年から寛永十一年まで、また八人衆体制が解体して京都町奉行が設置される寛文八年（一六六八）までに区分される画期に対応して、慶長六年の京都所司代の設置、慶長六年から八年にかけての二條城の築城、寛永二年（一六二五）の伏見城の廃城とその機能の二條城への移管、また元和元年（一六一五）の五味豊直、同元和三年の小堀政一の京都所司代の職務分轄・分担に関わる

代官・郡代・伏見奉行職への登用、同五年の伏見城代廃止と大坂城代設置、大坂町奉行設置などがあつた。

その過程で、二條城は伏見城廃城によつて政治的拠点とともに軍事的拠点の側面も備えるように整備された。それが二條城代の配置と廃止、大番組を中核にした警衛体制であつた。これは、さきの京都・大坂および畿内・西国支配体制の構築過程と対応しており、元禄期に試行された京都町奉行所・大坂町奉行所の機構改変、また畿内代官を中心とした肅清などの支配機構の改変にも対応している。元禄十二年（一六九九）の東大手門・西御門を守衛する御門番組の再編成は二條城警衛体制整備の最終的な仕上げであり、元禄期の畿内・西国の支配機構改変と関連した二條城警衛体制の確立であつた。

〔注〕

（1）畿内・西国支配の機構また体制については、安岡重明氏の「非領国」論（同氏『封建経済政策史論』晃洋書房、一九八五年）、藪田貫氏の支配国論（同氏『摂河支配国論―日本近世における地域と構成―』脇田修編『近世大坂地域の史的分析』所収、御茶の水書房、一九八〇、後に藪田氏『近世大坂地域の史的研究』二〇〇五年）村田路人氏の広域支配論（同氏『近世広域支配の研究』大阪大学出版会、一九九五）などの諸研究があり、最近では岩城卓二氏『近世畿内・近国支配の構造』（清文堂出版、二〇〇六年）、小倉宗氏『近世上方支配機構の研究』（塙書房、二〇一一年）などがある。これらはいずれも朝尾直弘氏の研究、特に「畿内における幕藩体制」（『近世封建社会の基礎構造』御茶の水書房、一九六七）という視点からの研究に続く、それを承けた研究として展開されている。筆者も支配所・支配国論を提起している。拙著『大坂町奉行の支配所・支配国』（東方出版、二〇〇五

年）。

- （2）拙稿「近世京都における与力・同心体制の確立」（佛敎大学『歴史学部論集』第二号、二〇一二年）。なお拙稿「近世大坂における与力・同心体制の研究」（佛敎大学『文学部論集』九〇号）も参照されたい。
- （3）大坂町奉行と堺奉行は元禄九年（一六九六）から一五年まで併合され大坂町奉行が三名に増員され兼帯、京都町奉行と伏見奉行は同九年から一一年まで京都町奉行が三名に増員され兼帯しているが、一一年に元に戻している。代官の肅清については、天和年間から始まり、多くが元禄元年から四年に集中しており、遠島・断絶となつたり罷免されている。また、京都町奉行の与力・同心が東西それぞれ二〇騎五〇人に再編成されたのも元禄十二年であつた。『実紀』第五篇・第六篇参照。なお前掲拙稿「近世京都における与力・同心体制の確立」、丹羽家文書『御組由緒記』―二條城守衛與力由緒記録―（佛敎大学鷹陵史学会『鷹陵史学』第三十六号、二〇一〇年）も参照されたい。なお以下の『御組由緒記』からの引用は『鷹陵史学』第三十六号の翻刻版によつて行っている。『御組由緒記』は御門番組与力によつて宝暦五年（一七五五）に書かれた御門番組の由緒書である。
- （4）前掲岩城卓二『近世畿内近国支配の構造』、前掲小倉宗『近世上方支配機構の研究』。
- （5）前掲朝尾直弘『近世封建社会の基礎構造』。
- （6）『京都御役所向大概覚書』上（清文堂出版、一九七三、以下『大概覚書』）「京都所司代之事」参照。
- （7）『徳川実紀』（新訂増補国史大系版）第一篇、以下『実紀』、寛政重修諸家譜第十三、以下『諸家譜』、丹羽家文書による。
- （8）『京都の歴史』第四卷近世の展開ほか参照。
- （9）『諸家譜』第二、第十三。なお勝重に配属された与力・同心は子の重宗が所司代に就いたときに廃止され、復活は牧野親成が所司代になった承応三年（一六五四）である（『諸家譜』第六）。したがつて勝重・重宗期の京都所司代与力・同心は位置づけが不安定であつたともいえる。前掲拙稿「近世京都における与力・同心体制の確立」参照。

- (10) 『京都の歴史』第四巻に代表される一般的な見方であろう。
- (11) 『実紀』第二篇。
- (12) 『実紀』は『元和年録』他の幕府日記をもとにこれを記している。
- (13) 丹羽家文書『御組由緒記』、『諸家譜』第十七、第九、『京都の歴史』第四巻、第五章第二節参照。
- (14) 『慶延略記一』（『内閣文庫史籍叢刊』八二）。
- (15) 伏見城代については、松平隠岐守定勝を「伏見藩」の城主ととらえる見方もある（『国史大事典』「伏見藩」参照）。『慶延略記』の記録では大番頭も配属されており、徳川政権が城主として与えた城に將軍家臣団の大番頭を配置することは考えにくい。ここは記録の通り、定勝を城代としておくことが妥当であろう。
- (16) 『慶延略記一』、「元和三丁巳年ヨリ伏見在番一年代二成」とあり、高木主水正次と阿部左馬守正吉が任命されている。
- (17) 前同、「元和五己未年ヨリ伏見在番相止、摂州 大阪在番初ル、大御番頭兩人ツ、」と記し、伏見在番の停止と大坂在番の開始を記す。大坂在番には大番頭松平石見守康安と松平豊前守勝成が任じられている。
- (18) 『京都の歴史』第四巻以来の一般的な見方であろう。また『大概覚書』上には二條城について、「二條 御城有来り候所、慶長七年之此迄新御屋敷と申、又ハ二條御所共申候由」と注記し、城郭というところえ方はしていなかったように見える。
- (19) 丹羽家文書『御組由緒記』、『京都の歴史』第四巻第五章第二節参照。
- (20) 『実紀』第一篇、慶長十二年五月二三日の条に「この日大番頭水野市正忠胤。渡邊山城守茂をして。其隊下の番士を引つれ伏見城を勤番せしめらる。これを三年番といふ。番頭は一年にて交代し。番士は三年にて交代す。八月十二日をもて交代の期たるべしと定めらる。山城守茂今年末より上番す」とある。この経験が二條城代任命の要因といえよう。前掲『慶延略記一』参照。
- (21) 『京都の歴史』第四巻、第五章第二節参照。
- (22) 『実紀』第二編、寛永二年四月の記事。これは、『寛明日記』（『内閣文庫史籍叢刊』六六）に基づいた記事である。
- (23) 丹羽家文書『丹羽氏由緒書』。
- (24) 『江城年録』（『内閣文庫史籍叢刊』八二）。渡邊茂については『諸家譜』第八。
- (25) 春日・柘植の配置については、後の二條城御門番組与力丹羽氏の記録『御組由緒記』では柘植の二條城配置を慶長四年（一五九九）としている。柘植三之丞の『諸家譜』第九の記事では、関ヶ原出陣は慶長五年、伏見城番勤務は同八年である。
- (26) 前掲『慶延略記一』。
- (27) 『実紀』第二篇、寛永二年四月二日の条。『諸家譜』第八。
- (28) 前掲『江城年録』。
- (29) 前掲『寛明日記』（『内閣文庫史籍叢刊』）。
- (30) 『国史大事典』「二條城代」の項参照。解説では、二條在番が元禄十二年に城代職務を引き継いだとするが、引き継ぎは寛永十二年に大番頭が引き継いだとすべきであろう。
- (31) 『実紀』第二篇。
- (32) 前掲『慶延略記』。
- (33) 丹羽家文書『御組由緒記』。
- (34) 前掲『御組由緒記』。
- (35) 前掲『御組由緒記』。
- (36) 前掲『御組由緒記』、「厳有院様 御代延宝四丙辰年迄者当御組與力無御座、同心式拾八人三而西御門 御番所相勤来候処、其節之頭水野甚五左衛門依願與力三拾騎之内六騎当御組ハ被為分、此時ハ西御門御番所與力老人宛上番相勤申候、依之御城番組三拾騎之與力式拾四騎ニ罷成候」と記す。
- (37) 前掲『御組由緒記』。
- (38) これは与力・同心が地付化・土着化した世襲の官吏と見なされるようになったために譜代並の与力として扱われるようになったことを示しているようである。また新規の同心一五人の系譜のうち六人が召し抱え当初から扶持米を支給されていないという指摘は、同心仲間内での身分的な区分の存在を窺わせ、同心の実態を探る手掛かりともいえる。

う。

- (39) 前掲『御組由緒記』。
- (40) 前掲『大概覚書』および前掲『御組由緒記』。
- (41) 前掲『御組由緒記』。
- (42) 前掲『御組由緒記』。
- (43) 前掲『御組由緒記』。

〔付記〕 丹羽家文書の利用については、丹羽氏昭氏のご高配を得た。記して謝意を申し上げる。

(わたなべ ただし 歴史学科)

二〇一二年十一月十五日受理